

# Young Children and Their Problems (年少児の諸問題)

by CIYDE M. NARRAM

足利市立北郷中学校 加藤 巖 訳(抄訳)

## 1 指しゃぶり

就学前のある子どもには、ほとんど指しゃぶりの問題はありませんが、絶えず指しゃぶりをする子どももあるようです。

同じ家族の中でさえ、ある子どもはそんなくせは無いのに、他の兄弟はそのくせにしばられていることもあるものです。早熟な赤ん坊は、おく手の赤ん坊より2倍も多い。指しゃぶりは普通、生後数か月の早い時期に始まります。場合によっては乳歯の生える時期に始まる時もあります。これはまれだが年下の兄弟(弟か妹)のまねによるものです。

早期の指しゃぶりは幼児が食物等を得ようとする単なる行動によって起こるものであります。そして、その行動は一歳ころまで残ります。また幼児はこの行動から乳幼児としての大切な快感を引き出しているのです。もちろん指しゃぶりの程度は多様です。

多くの赤ん坊は、授乳時のおしゃぶりだけで満足しているようですが、多くの子ども達の中には、おっぱいの授乳のおしゃぶりだけに満足を得ず、指やおしゃぶり器具に満足感を求める傾向もあります。事実、口という所は、生涯よろこびの満足感を起こさせる源であります。幼児のときは「吸う」という形をとります。子どもの時にはガムをかむことや、つめかみの形をとったり、大人になっては、キスやむしゃむしゃ食へたり、種々のものをかんだりする形を取るものです。

吸うことの対象物として、親指を選ぶことは、たぶん、幼児が行なう手の適当な動きから、偶然のことでありましょう。しゃぶる行動は満足に基づくものであることから、それはずっと続くわけです。時には他の指をもしゃぶるものです。

著名な権威者 *Harry Bakwin* と *Ruth Morris Bakwin* はしゃぶることの快感は、飢えや渇きを満足させるという連想を伴って起こるものだと言っております。この見解は、幼児は単にしゃぶることの反射作用を持っている、ということだけでなく、先天的な衝動として持っており食べたり、排せつしたり、暖かくしていたい、というのと同じような感覚でしゃぶりたいのだという、一般的な理論に反対するものといえましょう。

しかしながら、授乳を行っている子どもは、指しゃぶりを助長させているらしい、と専門医は見ているようです。

指しゃぶり、そのものが授乳と関連あるときは、それは1歳の終わりころには止むかもしれませんが、時には存続するものもあります。

研究者である *A. L. Gesell* と *F. L. Ilg* によりますと、子どもが一人にいる場合、または、自分は遊びに加わらないで他の子どもの遊びを見ながら、口の中に何時間でも指を入れて座っているのはだいたい18~21か月ころにピークになるようです。

ふつうこういう習慣は2歳ころになくなるものなのですが、時には5～6歳になるまで続くこともあるようです。ごくまれには大人になるまで続くこともあります。

指しゃぶりは睡眠とも密接に関連があるようです。多くの幼児は眠っているときや眠りにつくときに指を吸うものです。2歳児は睡眠している間に指を口から取ってやろうとすると、それに反抗しますが、3歳児は自発的に指を睡眠中にはずしてしまうものです。

さて、Billy君の場合をみてみましょう。彼は2歳のころ、2本の指を口に入れておりました。眠っているときでさえ、母親が口から指をはずすことを敏感に感じとりました。そして、Billyは急いで指を口に入れます。しかし3歳に近くなるころ、眠っている最中、口から指をはずしても、それを口にもっていかうとすることはしなくなったのです。こうして完全にその習慣は止みました。

他の困った習慣もときどき指しゃぶりを伴っています。こどもは、耳を引っばったり、頭をたいたり、髪を引っばったり、巻いたり、毛布やおかけをしゃぶったり、ほほやあごを毛布にこすりつけたり、顔の前に毛布を引いたり、そういった種々のことを行うものです。多くの幼児はおかけや毛布あるいはナブキンなどが、手ににぎられていないときに指をしゃぶるものです。

指しゃぶりに似ているものに舌しゃぶりがありますが、これは幼児が指をしゃぶることができない状態のときなされる場合です。この習慣は害もありませんし、普通2歳の間には消えるものです。

#### 歯の不ぞろい

指しゃぶりが、歯の不ぞろいに起因しているということは、一般に信じられているほど多くはありません。Goldbergの一卵性双生児についての研究と、Sillmanの連続的な研究によりますと、歯の不ぞろいは遺伝による要素が多分にあります。

幼児の歯は、種々の力を加えることによってかんたんに位置を矯正をすることができますが、ふつうこのような方法で矯正をした歯は、圧力が解かれると自然にもとの位置にもどってしまうものです。

ほとんどの場合、指しゃぶりは6歳までには消えてしましますが、場合によっては、永久歯の不ぞろいが原因でその後も続くときがあります。

指しゃぶりが過度に行われたり、5～6歳を過ぎてでもなされていることは、望ましくないことです。眠っているときだけ行われているのならまず安心ですし、両親の心配もそれほどではないでしょう。

#### 特別な工夫

ある両親は“万能薬”による成功を伝えています。これは特に、学校へ行かれる年ごろのこどもに対してです。しかし機械的な抑制や、にがい物の適用、指へテープをはってやめさせることなどこういったことには、いつも落胆させられたものです。まずこれらの工夫は思いやりがありません。これらのことは、どちらかといえばこどもの反抗をかうものです。それにこういった工夫は、しばしば注意を伴わず治療にあたるので、原因とか理解は見つけられない、という欠点があります。

多くの小児科医は、指しゃぶりはおしゃぶり(おもちゃの)を与えることにより治すことができるだろうと感じております。これは普通害は無いものと見なされますし、満1歳までには取りはらわることができるでしょう。しかしながら、おしゃぶりの問題の根本解決にはならず、習慣化させることにもなりかねない、と考えている小児科医もいます。

## 叱責

とがめたり、がみがみ言ったり、恥かしめたりすることは普通解決策とはなりません。そういったことはこどもの心を動揺させ、親の愛情を不安定なものにしてしまう傾向があるのです。指しゃぶりはこどもにとっては必要であり、楽しいものです。こどもはなぜ、それが許されないのか理解できないものです。事実、両親にしかられることは、指しゃぶりを拒否されることよりもむしろ自分を拒否されたものと考えられるかも知れません。指しゃぶりを眠っているときに限り気をつけて、治そうなんていう取りあつかいもさほど必要ではないでしょう。少しずつ少しずつ消えて行くものですから。

### 原因と解決の究明

1歳を過ぎ目がさめているときに指しゃぶりをしているときは、こどもが疲れすぎているか、退屈しているか、気げんが悪いか、気持が悪いかを意味するものです。あるいは病気の信号ともなっているかも知れないときもあります。治療は指しゃぶりそのものよりも原因を除去することに向かってなされるべきであります。こどもには適度の休養と十分な遊びが必要で、くせをつくらせるような問題の親の態度に対してもメスが入られなければならないのです。

こども達は家庭の不和に敏感ですぐに指しゃぶりをする場合もあります。スミスの家を例にとれば両親の結婚後のけんかとか心の不安定によるトラブルの結果、起こります。こういった騒動の中で育てられたこどもが、いらいらし、取り乱し、不幸であるということはごく自然でありましょう。こどもはたえ間なく指をしゃぶることによって不安感を示すのです。スミスの家庭に平和と平穏がもたらされたのは救世主としてのキリストを知ってからです。こどもの指しゃぶりが除々になくなって行き家庭にはじめて幸福をもたらされたことに両親は気づいたのです。

指しゃぶりをやったほとんどのこどもは、5～6歳ころにはそのくせをまったくやめるものです。ほうびをやる約束をすると、こどもは強い意志と虚栄心を表わし、そのくせをなくす方へ努力します。こどもにとっては、味の良くないものや、手袋を指にはめさせるのもくせを終わらせるのに効果があるかもしれませんが、しかし、最も大切なことは、全家族の暖かい人間関係にあるのです。

もし十分に手をつくしても、学校へ行っているこどもが指しゃぶりをしていたら専門家の手が必要で、ときには心理学者によるテストを通し、隠れた原因を究明して、両親に助言や援助をしてくれるでしょう。

もしこどもが特に神経質である場合など、母の不在や離婚などにすぐいら立ったりするものです。またそういう子は過度の批判、両親の過大な目標、不当な競争などで心も乱すものです。これらのことや他の不安要因がなぐさめと安全を求めて、こどもの指しゃぶりの原因にもなるのです。

要約すると、指しゃぶりはこどもの生活の中のいくつかの状態の組み合わせを表現しております。しかしながら各々のこどもは皆、ちがった原因を持っています。

指しゃぶりをするこどもをお持ちの(両親)は、がみがみ言ったり、罰を与えたりすることは慎むべきであります。こどもの環境や、心身の状態の中で起こり得る原因を探してやるべきです。そういった手続きが合理的で、実行可能な解決策となるでしょう。しかしながら、これらで効力がないときは、内科医、小児科医、または心理学者等の援助を待つべきでありましょう。

## 2 おねしょ

ひどいおねしょをすることも持ったことのない両親は、おねしょの件についてはよく理解できません。どこの両親も、時折、おねしょのことで悩まされるが、何年間も、こどものくせを直すためにあらゆることを試みている両親もいます。

### 推察されるべきこと

ほとんどのこどもは、2歳過ぎれば昼間のうちはもらさないものです。年齢が増すにつれ、夜もやらなくなります。ある調査研究によりますと、ほとんどの歳児は起こさなくても朝までやらないということです。専門的研究家である、*F. N. Anderson* は、インテリーの親のこどもの夜の膀胱制御の平均年齢は、23か月としています。また60人のグループについての研究では、昼間の膀胱制御を平均21か月、夜の方を27か月としています。

しかし、すべてのこどもがそういった平均期間内で制御がなされるとは限りません。4人に1人の割合で、7歳を過ぎてもおねしょをする、という事実が大勢の研究によって報告されており、第二次大戦中の *F. C. Thorne* 博士は、兵役のための被選抜者に面接した結果、5歳過ぎたこどもでも16%以上のものがおねしょをする、ということがわかりました。

さて、“男の子は女の子よりひどいだろうか？”という疑問がしばしば問われますが、実際両者は同じパーセントであると言われます。ある研究では、女の子より男の子の方がコントロールが難しいとされています。一方、他の研究結果は反対になっています。

こういうのを調査するのも興味あることです。多くのケースをみると、家族に寝小便という病歴をもつものがあることがわかります。要するに、せっかちで頻繁な夜の排尿は、両親がこどものときにしていたことです。そこでこどもをしかるのに両親も強く言うこともできないわけです。

4歳も過ぎたこどもがまだやっていると、両親はしばしばとり乱してしまふもので、“どうしたら止められるだろうか？”“なぜやるのだろうか？”と考えてしまうようです。事実、原因をさぐらずにおねしょを止めさせようとするのは、根は取らずに葉だけむしり取る草取りのようなものです。

### 原因

おねしょの原因を探しだすために、次のようなことをお考えになってみて下さい……………。

1. こどもが小さすぎて協力できない内に、親が止めさせようとする訓練に真剣になり過ぎなかったか。
2. こどもにその問題を話しすぎて、こどもに恐れをいだかせたり、悩ませたりして、コントロールがよくなりなってしまうなかったか。
3. こどもがいつまでも赤ちゃんのようであって欲しいと考えていることはないか。
4. こどもの生活の中で、彼を悩ませたり、緊張させたり、心配させるものがあるか。
5. 遺伝と思われるような行動様式はないか。
6. 神経系の病気のような重大な身体的な問題をばらんでないだろうか。
7. 発育が遅いのではなからうか。

肯定的なステップを取ることに。

原因はどりであれ、まず最初の治療は、おねしょ、そのものに対してあなた方があまり悩みを持つようにしないことです。これは何でもないことだ、と自分に言い聞かせられれば、半分は成功しているのです。もしあなたがおねしょに対する心配を止めることができれば、それがこどもに必要な助けとなることがわかるでしょう。あなたがこどもはおねしょを止める力をもっていることを信ずることがこの助けとなるのです。このおねしょの原因の一つは、こどもが自分は厄介者なんだ、ということを知っていることにあります。こどもはあるがままの姿で両親に受け入れられ、好かれている、という安心感が必要であります。こどもは自分の存在をみとめてもらえないと感じると、おねしょがおねしょの輪をかけることになるでしょう。こうして、あなたがこどもを信頼している、とこどもに感じられるようになればしめたものです。

両親はおねしょをしたこどもをとがめることは慎むべきであります。こどもを非難したり、友人の前でそのことを言ったりしてもいけません。こどもは最も愛している人から恥しい思いを受けなくても、困っているのです。ある親は、5～8歳になるこどもにおしめをさせようとしてしました。これは残酷で効果などありません。これはこどもをより憤慨させ、不安定にさせるだけです。ある小児科医は、おねしょをする子の親がやはりこどものときはやっていた、とどべている。

もしこどもが、自信がないように思えたら、あなた方がこどもに独立する機会を十分に与えてなかったのでしょうし、こどもにもっと責任を持たせる方法を見つけたいと思いでしょ。そのこどもは多分友だちとの無鉄ぼうな遊びなどから、あまりにも保護されすぎてきたので、強い監督なしの自由が必要なのです。多分彼は、あなたの手助けなしに一人でも着ることもできるし、家の囲りでの使い走りもやるのです。そういうことが自信を与えることになるのです。

もしあなたのお子さんにおねしょが現れたり、あるいは下にこどもが生れてから、ひどくなったというような時などには、少しでも多くそのこどもさんにもっと個人的に注目してやるのが賢明であります。父親が本を読んでやったり、母親がいっしょに散歩してやったり、親とお祈りをささげたり、そういう時間を持つことが、だだをこねる赤ちゃんに対するのと、全く同様大切なことなのです。

もし両親がこどもを扱う方法に、矛盾や不一致なことがあつたりすると、こどもは混乱します。このような場合は、もっと話し合い、理解しあう時間が必要であります。こどもをどのように取り扱うか、ということに不一致な点があれば、彼にとってそれは混乱につながるのです。こどもは父母のどちらの論を取ったらいのかわからなくなるのです。

ともかく、あなた方の目的は緊張を取り除き、こどもができるだけ安らぎ、楽しく振るまえるように気をつけることです。活気があり、十分な睡眠と休養や適切な日課は、こどもが、この問題を克服し易い環境をつくるもととなるでしょう。

両親は、おねしょというものは、こどもが自分では完全にコントロールできないものだ、とわかったとき、こどもに対してとても共感的になるものです。こどもと共に静かに話し合ったり、こどもを安心させたりすることが、こどもをリラックスさせておねしょのコントロールを可能にしていくことにつながるのです。ストレスや緊張感があつたり興奮したりすると、こどもはおねしょをする

場合があります。ふつうおねしょをしないこどもでさえ、彼がいらいらしているときなどは、おねしょをすることがあります。

夜、両親がおやすみになるころこどもを風呂に入れることなどは、おねしょをしないようにする一つの方法かも知れませんし、また目ざまし時計や、うすあかりをつけておくことも、夜を難なく過ごさせることに一役かうかもしれません。

あなたのお子さんが、おねしょをついに止めたとき、今までの事実について何も言っはなりません。このことは、あなたがこどもに対して心痛はしていなかったことや、適当な時期がくれば直ることを期待していたことを何となく知らせることにもなります。そしてこのことが、この問題の再発を防ぐのに役立つのであります。

### 3 かんしゃく

親というものは、自分のこどもがとつぜんわけのわからぬことを言い始めたりすると、非常に驚くものです。しかし、たとえ小さな赤ん坊でも意志表示はするものだ、ということは知っておるものです。いわゆる“かんしゃく声”というものは、空腹、窮くつな着物、疲労、あるいは腹痛、身体の不快感、そういったものを、単純に表わしたものと思われます。

多くの場合、赤ん坊は協力的ですが、2歳前後、つまり歩いたり、話し出したりするころ、事は変化し始めます。何とかわかることばで主張し始めます。かんしゃくはあたりまえのようになってきます。この年ごろの子は、たとえふつうおだやかなこどもでも、怒りを持つと自分の安らぎをこわしてしまうこともあるものです。これは、赤ちゃんが自分の要求をもっとよく知ってもらうことが、できるようになってきたことを意味します。身体的には割合自由になり、広くなる自分の世界を探検し始めます。自分の決断もし始めます。まだ赤ん坊が無力で何もできないときは早く何か行動を、というように彼に行動を要求しますが、彼が歩き始めたり、話し始めたりすると、今度は彼に大人と同じようにセルフ・コントロールできる行動を期待してしまいます。“do's”とか“don't's”はこの時期には簡単には結びつきません。“Go”だけが支配的な心理誘因なのです。

こどもの怒りや反抗心は徴候をとめるごくふつうの反応でもあります。こどもの必要とするものを親がコントロールしてやることは大切なことであります。家族の年上の者たちの望みに合わせようとする過度な抑制は、幼児期にかんしゃくをおこさせるばかりでなく、後年、問題となるような欲求不満の感情を抱かせるようになるでしょう。

どうしたら良いか。

こどもが、着たり、食べたり、あるいは何か大切なものをあきらめたりすることに反抗心を現わすときは、次の二つの方法が考えられます。一つは早くあなたが心を決めること。もう一つは、反抗心を尊重したり彼の目をみて場面を判断してやったり、やろうとする努力を評価したり、援助したりすることです。あなたはこの二つの行為のバランスを自然と考えるようになります。このことが続けられることは良いことでしょう。こどもの反抗を押えつけなければ、こどもは目上の人を尊敬するものです。目的は、親がこどもをおさえつけることでなく、こどもとの協力的な関係を作ることにあります。もちろん時間がかかります。というのは小さなこどもは非常に試行錯誤が多く、大人にとっては

疲労を伴うものですから。近道はないのです。

こどもがかんしゃくを起こしているときには、こどもを違った興味のひく場所へ連れていって静かに語り合ったりすることは良いことでしょう。罰を与えることはできますが必要ではないのです。罰は一般的には解決策とはなりません。こどもは自分のおこした問題を自分で考える必要がありますし、また、彼が何をやり、この次はどのようにしてそれをやらないですむかということを考える必要があるのです。こどもをめったなことでは決してたたくものではありません。

しかしながら、ときにはたたくこともしつけの効果的な意味を持つことがあります。私どもはこどもとともにいるとき、彼等も人間の一人なのだ、ということがほのほのとわかってきます。そこで彼らにとってはガイダンスとコントロールが必要なのだ、と。

かんしゃくのわけのわからぬことばを考えるとき、それを予防しようという配慮がすでに治療に備えるものと思われれます。こういうことが良いことなのです。心配ごとにとっては、疲労や飢えはこどもの突発的な怒りを起こし易いようにします。確かにお子さんは十分な睡眠と定期的な食事が必要です。また発達段階に応じた遊び道具や、同じ年ごろの友達も必要なのです。好きな物を食べるようにこういったものを要求するのです。こどもに対しての大人の愚ふざけをくり返すことはよくありません。それは解決策とはなりません。愛情ある援助が、かんしゃくの徴こうや、腹立ちの感情を未然にふせぐものでありましょう。

もしあなたのお子さんのかんしゃくが、あなた自身の心を失わせているようなことであると、こどもの反抗はただ増すばかりであります。こどもには常に注目し、本を読んでやったり、ともに話をしたり、お祈りをささげたり、もっとたくさんの時間を友達と過ごさせたり、そういつたことをやってみてください。かんしゃくによってこどもが意志表示をしていることが明白であるときは、彼を少しの間、孤立した所へ置くことも得策かと思われれます。“やだー”と彼が叫び声をあげたとしても心配には及びません。あなたを憎んだりしているのではないのです。それは未熟なこどもがしゃべることなのだ、ということをお思い起こしてください。またそれは一人の人間を排除する、という意味にはなりません。このように言ってください。“そうだね、おまえをとっても好きだからだよ。そしておまえも私のことを好きだということを知ってるよ”と。

#### あなたの毎日の診断

もしこどもがかんしゃくを次々に起こしたなら、何がそうさせているのか理解するようにしてください。これはたった一つの解決策なのです。たとえ、かかりつけの小児科医であっても、その原因をみつけ出すにはあなたほどにはなれません。あなたほどの人は他にないのです。あなたは毎日こどもとともにいて、こどもがいつ寝ているのかわかるし、いつが疲れているのかもわかります。また、どんな時に楽しく、どんな時に怒るのかもわかるのです。それに他のこどもとの比較もあなたがやることです。こどもの家族に対する行動も観察できますし、知らない人といるとき、こどもがどのような行動を取るのかも知っているのです。あなたは多面的なこどもの見方ができるわけです。ずっとみられるわけです。もしこどもをちゃんと観察しているならば、家庭ほど良い診療室はありません。

こどもの行動について考えるとき、次のことについて配慮してみてください。

(1) 身体～こどもの健康はどうか。欠かぬがないか。強い子か。何か隠れた身体的な問題でハンデ

ィキャップを持たされているのではないか。

(2) 知能～知能はどうだろうか。平均値は、あるいははずばぬけた知能を有していないか。また平均より低いのではないか。他のこどもと比較して同じようではないか。学習において不安感を持っているか。好奇心が強くないか。良くものをおぼえるだろうか。

(3) 感情～どのように感情を出すか、うれしいときの反応は。どのようにおこるか。怒った時かどうか、愛情を願望してるようであるか、いろいろな感情表現の中で他のこどもと比較してみるとどうか。

ご承知のごとく、こどもでさえ、身体、知能、感情、精神の発達において、それぞれ特徴を有しております。これらの一つが、あるいは組み合わせが不適當であつたりすると、こどものかんしゃくの原因となるときがあるかも知れません。この四つのことに関してあなた方が毎日考慮をしていさえすれば、こどもを扱う場合、神はあなた方に大きな力をお与えになるでしょう。これらの中で一つでもそういったことに専門の人にくわしく話して、援助を得るのも良いかと思ひます。

良い見本となること。

親としてあなたがかんしゃくを止めさせようとする気持ちを持つ余裕がないと、事態は悪い方へ広がってしまいます。良い見本をつくることはあなたの責任であります。こどもは見たり聞いたりするものに反応を示すものです。静かな環境にいれば静かになり、またいっぽう騒々しい環境にいとそれに同化し、騒々しくなるものです。

健康がすぐれないのだから、あるいは家族の者にとっては荷が重すぎる、と思つたりして、ある親はこどものかんしゃくをかまわない人もおります。またある人は、感情的に悲観させられたりします。専門的な診断と処置が必要なのです。あるいはこどもの成長にかかわる発達要因など理解もしない者もあります。それになお、ある両親は神をも信ぜずこどもの感情をコントロールしようとしないのです。親として私たちは自分を試し、私たちのこどものために価値ある手本となるように心がけねばならないでしょう。

#### 4 ことばの問題

こどもたちとごく身近に接している方々は、彼らの話すことばには何らかの問題があることに気づきます。ことばの発達<sup>は</sup>複雑でありまして心身の発達にも関連があります。それはまた家庭や学校の生活環境から生ずる感情にも強く関係があるものとも思われます。これらの中で未発達のものや損傷葛藤があつたりするとことばの問題が起こるものと思われます。またそれは別だんおどろくことでもなく、たいていのこどもは話すことばに関しての何らかの難点をもっているものです。そういう難点はなかなかがん固なものもあります。こどもの行動は、しゃべりながらするものです。従ひましてことばに難点のあるこどもは決してそれを忘れることがありません。他のこどもと絶えずハンディキャップをつけられてしまうのです。

ことばのおくれ

ほとんどのこどもは、1～2歳の間にことばをしゃべり始めます。非常に遅いというのはまれではありません。もし2歳過ぎてもまだしゃべり出さない子がいたとしますと、理由は次のようなことに



なりましょう……………。

- (1) 単に発育が遅いということ。もしそうなら時期がくれば必ず話し出します。母親が物静かで、おしゃべりが好きでない人だとすると、彼女はもっとたくさん子どもに語りかける必要があります。話しかけられたり、本を読んでもらったり、絵を示されたりすることが最も効果的です。
- (2) 子どもが話し始めるとき、ゆっくり話したり、しばらくつかえてしまうことがあります。これは子どもが何か目新しいことを一生懸命やるときにやります。この間は、子どもはすでに部分的に習った他のことについてはほとんど進歩しない。たとえば、クツをはくのやスプーンを持つことを練習している子どもは、しばらくの間知っていることばも使いません。
- (3) 子どもの要求に気を使っている母親が、あまりにも早く感じとるので、子どもは話す必要性を感じなくなることがあります。そのようなときは、子どもが自分の要求をはっきり言えるように援助できるでしょう。ジェスチャーや、ぶつぶつ言ったりすることでコミュニケーションすることに頼っているかぎり、子どもはなかなか話そうという努力をしないでしょう。

- (4) ときおり、しゃべり始める子どもはよくできたとしてもほめられるものです。彼は訪問者に対して、そのことばを示すように励まされたり、何度もくり返すことを要求されたりします。中には話すことを拒絶されたため、抵抗する子もいます。困惑し習慣化した子どもの感情にかかわっていると、コミュニケーションにおける彼の興味を減退させてしまうから、そういった子どもを一人にしておくことも必要かもしれません。

子どもの反抗的な行動を意図的に無視しようとする両親は立派です。そういうときに子どもはしゃべる必要にせまられるのです。気の立つことよりむしろ興味のあるものを両親が示してやると、子どもの内気な心と自意識は消えていくものと思われます。

- (5) 病気とか極度の栄養失調などは他の発達をじゃまするように、しゃべることにおいてもおくらせてしまいます。人間の組織は全て相互関係にあるので人体というものは生活のどの部分にも影響しあうものです。
- (6) 通常の時期に話のできない子は、つんぼの可能性も考えられます。ある子どもはつんぼで生れてくることもあるでしょうし、烈しい病気の併発により聴力を喪失する子どももいます。つんぼあるいは難聴の子どもは他の子どもとすぐく差異を持ってしまいます。そして、その子どもたちには特別の話し方とヒアリングの訓練があるものです。
- (7) りこうな子は早く話し始めますが、平均以下の子とか、精神障害を持つ子どもは話し出すが遅くなります。こういう場合は心理学者とか精神科医に相談すべきです。脳障害の結果として話すことに欠かんが現われたり、精神障害があったりしたときには、子どもは自分のやらねばならないすべてのことにおいて遅れをとることが続きましょう。以上のような知識なしに両親が自己流に話し方の訓練などしても全くむだであります。

生来の左ききの子どもが右ききに強いて直されるとどもりになることが多くの人によって信じられています。きき手をかえることがどもりの原因とは多分ならないだろうが、子どものきき手をかえてやろうとする両親は、がん固で無分別といってもさしつかえないでしょう。そのような親に対しては、ちゅうちょしたり緊張して話しかけるでしょう。一方、左ききの子どもが二流で

一人前の右ききよりも一流の左ききになったなら全パーソナリティーによい結果をもたらすでしょう。

- (8) こどもの言語障害が、短舌というような話す器管の変形にかかわっていることはきわめてまれであります。みつくちや口蓋裂を持つ子にとっては、特別のスピーチの訓練が必要であります。

#### ことばの問題の普通のタイプ

##### (話すこと)

こどもたちの話すことの問題は、単語の明確な発音に関連しているものが多いものです。特別な例では医師等の診断も必要ときさえあります。そして、こういうことについての両親や教師のその問題に対する感受性が非常に大切なものになってきます。こどもに不当な注意の促すことなく、励ましてやることは、改善に大変役立つことです。ことばの難点のほとんどは両親の援助のしかたのあやまりに関係しています。

心理学者やことばの専門家の協力をあおがねばならない問題は……。

- 言語の遅滞—話すことを拒否したり、幼さのぬけないしゃべり方をしていること。
- どもり——口どもりや難発、けいれん、くり返して同じことを言うこと、などによって特色づけられている話し方。
- 声の問題——高低、音量、質、響き等におけるゆがみの差がつくこと。ひどいしゃがれ声、耳ざわりな音声、鼻音、高い声など。
- 発達の問題——一つの音声は正確に表現されるが、随意に話すことになる、早口で不明りょうな発音になったり口の中でもぐもぐしたりすること。あるいは早すぎる速度で不明りょうであること。

方言は外国語を使用したり、他地区の言語特性を習ったりしていることから発生する場合があります。そういったこどもたちのアクセントのある話しぶりは、文の旋律の形や、確かなシラブルに対するの強く言いすぎる点に関連するものが大いにあります。

賢明な大人であれば、こどもたちに当惑させることなく、まちがったアクセントやイントネーションに注意させ、正しい方向に導びいていくことができます。しかしながら、こどもというものは自分がたえず所属している集団の中の話し方や聞き方などに簡単に慣れてしまうものです。

##### しゃべり方の発達

ことばは連続的にたえず発達していく、ということを知っている先生や親は、こどもの変なしゃべり方やゆがみに意味があることに気づきます。

7～8歳の頃まで話し方はどんどん発達しますが、いくつかの音声の発生にあたって困難を伴うことは確かです。これらの年ごろのこどもであって、普通のことばの発達が見えないようなときは、特別な治療が必要となってしまうでしょう。もし小学1年になっても言語障害が見られるとすれば、その子にとっては特別の診断と助力が必要なのです。

学校組織がどうであろうとも、学校は次の5段階のことを意にくんで広い言語障害児の教育計画を作成すべきである。

- 全クラスのスピーチの向上を図る感受性を持つこと。
- 言語に問題を持つ子どもをもっとゆきとどいた中で特別の援助をしていくこと。
- 言語に問題を持つ子どもを改善することや両親のカウンセリングにあたる。
- より正確なスピーチをさせるため、教師自身が、その専門的な技術を向上させること。
- 特別な援助を必要とする子どものために地域の他の機関との連携を保つこと。

明確に話させること

どもりをなくしたり良い話し方をさせるために次のようないくつかの方法があります。

- (1) 子どもに対して聞き上手になること。
- (2) 子どもにはこどもらしい話し方をさせる。子どもは大人のようにはいできない。  
子どもは大人と比較できないから、子どもに合わせた基準に従わなければならない。
- (3) 子どもの動作について、あなたがふだん期待していることについても一度考えてください。  
子どもがその年齢以上のしゃべり方をするようなことは期待しないこと。もちろん、ゲームをやったりする能力、静粛にしていること、きちんとすること、その他発育上の様子においても年齢以上の期待はいけません。
- (4) もし子どもが口ごもったり、何度もくり返しているような話しぶりが見えたら、それは回りの人に対する感情に問題があるものとしておとりください。  
毎日のこどもの生活はできるかぎり気を使わない、リラックスなものであるようにしてください。子どもにものをむりに暗唱させたり、歌わせたり、聖書の中の一節を言わせたりすることを強いて要求しない方が良いでしょう。それから食事のことや、昼寝のこと、就寝のことについてもやきもきとしてはいけません。
- (5) 子どもがあなたを信頼するようにすること。子どもには物ごとを説明してやること。新しい経験には時間を用意してやること。からかったり驚かすのは極力ひかえるように。興奮させたり急がせたり、抑圧したりするものもできる限り避けたいものです。子どもとともに祈り、神について教えをほどこしてください。すべてこういうことがこどもの平和な人生を助長させるのです。
- (6) 常にこどもの健康に留意すること。身体の弱い子は言語障害にも落ちり易いものです。元気がないこと、長びく病気などもスピーチに影響するものと思われます。
- (7) こどもの気質を理解してやること。神経質な子どもは時おりどもったりすることで心の内部の葛藤を表現します。もし彼が、常に攻撃的な子どもといたり、家の中の人や彼を支配する人たちとうまくやっていくように期待されたりすると、彼はことばの問題を現わし始めるかも知れません。

たとえば、リンダちゃんの例をとってみます。彼女はひ弱な子で保育学校に所属している神経質そうな子でした。学校に入って数週後、彼女はどもり始めました。そこで両親が調べたところ、2人の大きなケンカ好きな子どもが、そのグループの中で他の子どもを困らせていた、ということを発見したのです。大勢の中では、リンダちゃんは自分が困惑することに恥じらいを感じていたのです。早速そういう環境を取り除いてやり、リンダは徐々にどもりが直っていっ

た。リンダのような多くの子どもたちは疑いもなく、自分でうまく対処できない困惑した状態によっていらいらを起し、悪くなっていくようです。ふつう何でもない子どもが、ことばに関する問題を起し始めたなら、両親は子どもが望ましくない状態におかれていないかどうかを注意してみるべきです。

- (8) その問題を克服するのにあまりかまわないこと。両親、先生は、あまりにも難かしいことを子どもに期待するあまり、ますます子どものことばの問題を深くしてしまう場合があります。大人は子どもの能力に応じて、子どもの期待をもう1度良く考え、注意をはらうべきであります。子どもへの不当な抑圧は子どもがそれに対処していくのに困難でありますし、ことばの異常に対しても良くない結果をもたらしてしまいます。子どものことばの批評は、彼自身の人間性への批評と感じられるものです。両親、先生方はつねに思慮分別を持ち、ことばを批判するのでなく、改善するようしなければなりません。子どもが不快であるかないか、ということさえも、彼の話しぶりにかかわることをお気づきにならねばなりません。子どものスピーチが上手になるように大人は子どもを励ましてやり、また、考えや感情を自由に表現できるように快い雰囲気を作ってやるべきであります。

もし子どもがひどい言語の問題に落ちいったとすれば、何はともあれ医者や心理学者や言語に関する専門のセラピストの援助を必要といたします。

それから最近学校でもどんどん子どもたちのための、言語障害矯正機関を持つようになってまいりました。そして地方の子どもたちもその恩恵にあずかるようになってきました。

良いスピーチは全ての子どもにとって大切なことであり、私どもはできる限り努力せねばなりません。

コミュニケーションは、個人の幸福と全パーソナリティーの発達のためにきわめて重要なことですし、言語の問題の援助は、大人が子どもにしてやれる偉大な貢献の一つでもあります。